

4. 技術的手法のポイント

「那須の森」において子ども向けの自然体験・学習プログラムを実践する際の技術的手法について、今後『那須の森』で活動するインストラクターのための手引書を作成した。

■技術的指導のポイント:

(1) 環境教育で伸ばしたい力

本事業で作成したプログラムは、体験活動の作業の進め方、インストラクターのかかわり方によってプログラムの位置付けが変わっても構わない。また、季節や時間、場所などによってもプログラムが選べるよう、各プログラムには要素を表示している。

プログラムを選んだり、インストラクターなりに応用したりしてプログラムを実践することを想定している。「体験学習法には失敗はない」と言われており、これらのプログラムは体験学習法の考え方を大切にすれば、そこから何かを学ぶことはできるはずである。

「那須の森」の中には様々な環境があるが、里山が共通のキーワードとして挙げられる。学びの切り口としては、「里山の保安全管理」「里山の生態系」「森の歴史的変遷」「自然環境保全」「自然観察」「里山の文化継承」「人とのかかわり」「芸術的なかかわり」「癒しとしてのかかわり」など、たくさん挙げられる。そして、それぞれの切り口に、さらに細かい切り口が存在する。

こういった切り口それぞれについての理解は大切である。しかし、環境教育ではこういった切り口のことを素材あるいはテーマとして扱いながら、自分で発見したり、つきとめたりするための、個人が持っている能力を伸ばすことを目的とすべきである。そうすれば、誰に教えられなくとも、自分で環境に対応したり、自らの力で生きていけるようになるからである。

(2) 環境教育の目標段階

ベオグレード憲章(1975年に行われた国際環境教育学会で可決)では、環境教育目標段階を6段階に分けている。

関心: 全環境とそれに関わる問題に対する関心と感受性を身につける

知識: 全環境とそれに関わる問題および人間の環境に対する厳しい責任や使命についての基本的な理解を身につける

態度: 社会的価値や環境に対する強い感受性、環境の保護と改善に積極的に参加する意欲などを身につける

技能: 環境問題を解決するための技能を身につける

評価能力: 環境状況の測定や、教育のプログラムを生態学的、政治的、経済的、社会的、美的、そのほかの教育的見地に立って評価できる

参加: 環境問題に関する責任と事態の緊急性についての認識を深めて、環境問題を解決するための行動を確実にすること

また、別の目標段階の設定としては、以下のようなものがある。

- ・ 自ら問題に気づく能力を身につける
- ・ 自ら問題の原因についてつきとめる能力を身につける
- ・ 自ら問題解決についての判断ができる能力を身につける
- ・ 自ら決断し、行動する能力を身につける

さらに、生物との関係でいうと、次のような段階の設定もできる。

- ・ 探し出す・見つける
- ・ 触れる
- ・ つかまえる
- ・ 特徴に気づく～観察する
- ・ 疑問をもつ
- ・ 推察してみる
- ・ 調べてみる・実験してみる
- ・ 結論を出し、まとめ、表現する
- ・ 面倒をみる
- ・ 生活できる環境をつくる

いずれにしても、自然環境、森、生物など素材対象となるものと私たちとの関係を見つめなおし、学びや気づき、あるいは関係する能力の目標段階を設定し、今行っている活動が全体のどの辺りのプログラムを実施しているのか意識することも重要である。断片的な活動は自然界全体への意識につながりにくい、全体を見つめた上での部分的な活動は、全体への意識につながるはずである。

こういった伸ばしたい力を、何らかの体験を通して参加者自らが学んだり、気づいたりしていくことが真のねらいである。

ともすると、「何をするか」という視点ばかりが意識され、どんな能力を伸ばすことに焦点があてられているのかといったねらいが不明確になる場合や、それが設定されていない場合がある。この場合は、体験すること自体がねらいになってしまい、その体験を通して学べること、伸ばせる能力についての視点が欠けてしまうこともある。本来は、ねらいとしている気づきや学びにつながる体験とはどんなものか、というように考えながらプログラムをつくっていくべきである。「何をするか」が先行して決まった場合でも、後付けでねらいを設定するようにするとよい。そうすれば、実践される体験が学びの材料になる。

(3) マナー

フィールドへ出かけるときの服装や安全に対する準備、森の中での心構えについて気を配る必要がある。

自然環境の中では、昆虫や植物の採集などは原則として禁止する。フィールドに入る目的とマナー、生きものたちへの配慮について、わかりやすく子どもたちに伝えておく必要がある。プログラムによっては採集することもあるため、その場合は環境省のレンジャーの指導を受けながら行うように指導する。フィールドは、自然体験を通して自然を大切に考え、行動できる気持ちや知識や態度を養うための場所だということを意識して活動すると良い。

また、自然の生きものたちのために、ゴミなどの持ち帰りを徹底させるようにしなければならない。

(4) 服装と持ち物

遠足やハイキングに出かけるときの衣服や靴が基本になるが、夏でも、腕や足を出さない長袖、長ズボンが原則である。それは蚊やハチ、アブなどの昆虫や、林のある植物やかぶれる植物から身体を保護するためである。特に夏など暑い時期には帽子も忘れずに持つように促すべきである。

観察でよく使うものには、虫メガネ(ルーペ)、ビニール袋、軍手、地図、方位磁石(コンパス)などが挙げられる。

* カメラや双眼鏡は重くてかさばるため、プログラムでの必要がない限り持ってこないように指導する。

(5) 雨天、荒天の場合

事前に、雨天の場合の室内プログラムなどを用意しておけば、当日に雨ですべてが中止になることはない。ただし、雨の日ならではの生きものたちとの出会い、雨の日の森や空気の感触を五感で楽しめることもあるため、可能な範囲でプログラムを行うと良い。

(6) 実施計画書

以下の項目を記入した上で、相談・打合せに臨んでいただくように参加者団体に依頼することより、双方にとって誤認・誤解なく、プログラムを安全にかつ、目的にかなった形で行いやすくなる。

■記入日 _____ 年 _____ 月 _____ 日
 ■学校名： _____
 ■利用する学年： _____ 年 人数： _____ 人 ■引率の先生： _____ 人
 ■住所： 〒 _____
 ■担当の先生のお名前： _____
 ■電話： _____ ■FAX： _____ ■E-MAIL： _____
 ■開催期日： _____ 年 _____ 月 _____ 日（～ 年 _____ 月 _____ 日）
 時間帯 _____ 時 _____ 分～ _____ 時 _____ 分
 ■下見・打合せ希望日： _____ 年 _____ 月 _____ 日
 時間帯 _____ 時 _____ 分～ _____ 時 _____ 分
 ■当日の交通手段：徒歩・公共交通機関・貸し切りバス・その他（ _____ ）
 ■那須の森でのプログラムのねらい： _____
 （子どもたちに、 _____ を達成させたい）
 ■那須の森でやりたいこと： _____
 プログラム名： _____
 具体的な活動案 _____
 ■学習全体の構成（簡潔に） _____
 学習全体のねらい： _____
 事前学習 _____
 事後学習： _____
 ■相談したいこと（雨天時など） _____
 ■貸し出し希望物品 _____
 ■那須の森を利用する際に配慮すべきこと（ルール・マナーの確認） _____
 ■安全について（注意を要する動植物、救急病院など）： _____
 ■那須の森に配慮してほしいこと（障害者等への配慮など） _____
 ■その他： _____

■進行上の注意点とポイント:

●全体について

進行

- ・難しいところ、大事なところは、言葉を変えて繰り返したり、ゆっくり話す。
- ・話し方に強弱をつける。
- ・子どもたちの様子を見て、問いかけ(「どうしてだろう?」「なんでそう思う?」「どうしたらいいと思う?」など)を行いながら進行する。
- ・答えを言うのではなく、なるべく子どもに発言させる。
- ・なるべく子どもと視線を合わせるように心がける。
- ・一か所で立ち止まって話さず、子どもに近付く。
- ・子どもが聞き取り易い単語を用いる。熟語やカタカナはわかりにくいのでなるべく避ける。やむを得なく用いる時は、簡単な言葉も付け加える。「これがエコな循環、環境のためにうまくまわしていく、しくみなんだね。」など。
- ・発言した子どもを忘れない。プログラムを進める中で、以前に発言した子どもの単語を用いたり、「〇〇さんが言ったように」と付け加えらるとつなげて考えやすく、復習にもなる。

問いかけ

- ・回答する子どもが偏らないように注意する。
- ・最終的な答えを聞くのではなく、順を追って質問してあげると答えやすい。
- ・屈み、子どもの目線になると話しやすい。

問いかけ後

- ・子どもの答えは、否定しない。
- ・子どもの答えを復唱する。

●個々のプログラムについて

カード等を書く時

- ・書き出せない子がいたら、「どんな音が聞こえたかな?」と丁寧に何回か聞いてあげる。
- ・「今、どんな音が聞こえた?」と引き出す。
- ・「あっ今の音聞こえた?私(スタッフ)は『フィー』って聞こえたよ。」「何て聞こえた?」と一緒に音を聞き、音を発見し、引き出す。

仕事を伴うプログラム時

- ・子どもたちからの質問にどんどん答えていく。質問内容と回答は随時、必要に応じて全体で共有

する。

- ・子どもの発想を大切にし、大人のイメージを植え付けないように注意する。
- ・工作がなかなか進まない子どもに、様子を見ながら、「あっ今～～の音がきこえたね」「こうやったらできるんじゃないかな」などと助言をし、子どもがつくるもののイメージを膨らませ、作業を促進する。
- ・子どもの自由な意見を引き出すように、声かけをする。
例えば、「どんな音が聞こえていた？」
「それは森のどの辺に住んでいるかな？」
「その生き物のまわりにはどんな植物が生えているだろう？」など。
- ・風の音など目に見えないものの音をどう表現していいか迷っている場合
「風の音はどんな色だと思う？」「風はどんな形かな？」と風に対するイメージを引き出す。
- ・「これ何に見える？」「こんな材料もあるよ。」など話しかけコミュニケーションを積極的にとる。

クイズを伴うプログラム時

- ・答えは必ず、復唱し、否定はしない。
- ・答えが一つでも、何人かに聞いてみる。
- ・正解の場合は褒める。「どこで知ったの？学校でならったの？」と聞くのもよい。
- ・一人だけに聞いたあと、全体にも共有する。「学校でもう勉強したよ！もう知っているよ！という人？」と聞くのもよい。
- ・クイズ以外のところでも問かけながら進行する。
「動物にはできないけれど、植物がしていることって？」(二酸化炭素を吸収してくれる、光合成)
「地球がだんだん暑くなっているこの問題をなんていうか知っている人いますか？」(地球温暖化)など